

第十四講 人類の罪（一） 第三章一節—二十節の研究（四月二十四日）

一章十八節より本論に入りしパウロは、先づ異邦人の罪を挙げ次にユダヤ人の罪を責めた、その論述の順序の正當なるは勿論、その筆法頗る巧妙にしてユダヤ人を責めし場合の如きは先づ間接射撃を以て威嚇し次に決河の如き勢を以て肉迫する、寔に巧みさと鋭さとを兼ね合せた攻撃であつて、之に對しては如何に執拗なるユダヤ人と雖も一言の遁辭（たんじ）なしと思はれる、故にパウロは之より直ちに全人類の有罪を斷定し得るのである、恰も今日先づ不信者の罪を定め次ぎに信者の罪を定めし上は唯ちに全人類の罪を定め得るが如くである、併し乍らパウロの周密性は茲にも又現はれた、彼はユダヤ人の中より尚ほ二三の抗議あるべきを豫想して自ら彼等に代つて二三の反問を出し、そして之に對してそれぞれ簡潔なる答を與へて居る、この部分が第三章の一節より八節迄である、ユダヤ人問題についてはパウロは九、十、十一章に於て、自己の見る所を精細に發表して居る、故に今は頗る簡單に此問題に觸れるのみである、其様恰も大道を歩める時に道に横たはる二三の石を一蹴し去るが如くである。

第二章の所論に對してユダヤ人は先づ質問を發して云ふであらう「然らばユダヤ人の長る處（すゝも）は何ぞや、又割禮の益する所は何ぞや」（第一節）と、そしてパウロは之に對してユダヤ人に何らの長所なしと云は云はなかつた、彼等には種々の長所がある、しかも此長所あり神より多く恵まれ居るにも係らず、惡に其身を任す處に彼等の罪の特色が存するのである、さればパウロは此問に對して答へて言ふた、「それは凡てのことに於て益多し、先づ第一は神の論（まこと）をもて彼等に託（ゆだね）ね給へることなり」（第二節）と、「論」の原語 *λογιον*（ロギオン）は英語の *oracle*

(託宣)に當る、即ち神より人への默示の内容を云ふのである、使徒行傳七章三八節にては此語を以てモーセ律を意味し(「道」なる譯字を用ひて居る)、希伯來書五章十二節に於ては此語を以て福音を意味してゐる(「教」と譯してゐる)、語の性質上場合に依て内容を異にし得る語である、羅馬書三章二節の場合に於ては舊約の教全部を指すとも見られ、又第三節に照して判斷する時はメシヤ預言のみを指すとも見られる、この狹義の方の見方採る學者も少なくない、何れにせよ之を委ねられたる事これユダヤ人優秀の第一點である。

彼等の長處の「先づ第一は」之である、然らば第二第三は如何、パウロは之を擧ぐるを忘れし如くに第三節に於て直ちに第二の質問を掲げた、けだし彼は早く此箇處を終へて本問題に入らんために其歩みを早めたのであらう、彼は此際丁寧なる解答を答ふるの煩に堪へなかつたのである、即ち第三節に云ふ茲に「信ぜざる者あれど其を如何、その不信は神の信を廢つべきか」と、これユダヤ人の第二の反問である、茲に「信ぜざる者」とあるはキリストを信ぜざる者の意であるに相違ない、何となれば神を信ぜず又は神の約束を信ぜざる者はユダヤ人の中には當然一人もなかつたと推定さるゝからである、彼等はメシヤ降臨の約束に與れる民であるに其約束に應じてキリスト來れば之をキリストとして信じない、却て彼等は彼を十字架に釘けた、しかも彼れ復活して其キリストたることを實證し、使徒たちが其證人として立ちても彼等の中には尚彼を信じない者が多い、かく彼等の大多數が不信である上は神も亦ユダヤ人に係はる將來の救の約束を破り給ふであらうか、これ三節の意味である、そしてパウロは之に對して「然らず凡ての人を偽りとするも神を眞とすべし」(第四節)と頗る簡明なる解答を與へて居る、之を原語のまゝに譯せば「斷じて然らず、神を眞實とし、萬人を虚偽者とせよ」となる、人は悉く虚偽

者である、そして神は絶対に眞實である、不信とか虚偽とか云ふ思想は神といふ觀念と兩立しない、神が其約束に對して不忠實であると云ふ如きは神の本質上到底あり得ないことであると、かくパウロは答へる、簡單にして雄勁、白日の光の如く強き語である。

パウロは又ユダヤ人に代りて第三の質疑を起して言ふた「我等が不義もし神の義を彰す^{あらは}とせば、何を言ふべきか、怒を加ふる神は不義なるや」(第五節)と、ユダヤ人は不義不信にして神に背いてゐる、然るに神は義にして永^{とこし}へに變らない、然らばユダヤ人の不信は偶々^{たまたま}以て神の眞實を表はす機縁となつたのである、然りとせば神は寧ろユダヤ人に感謝すべきではないか、もし彼等に對して怒りを加ふるならば却て恩人に向つて鞭を加ふる如き不義となりはしまいかと、それ第五節の意味である、恰も放蕩息子あるがために親の愛心が發現されたとせば其親は寧ろ其子に感謝すべきであつて罰すべきではないと云ふ論法である、此詭辯の如き抗議を假に設けてパウロは之に對して答へて云ふ「然ることあらじ、もし然^さる事あらば神如何にして世を鞫^{さば}かんや」と、不義者を罰^{ばつ}せざる如き神ならば如何にして世を鞫^{さば}くことが出来ようか、神が審判の神である以上は到底不義者を罰せざるを得ないのである。

第四の反問は七節にある、「もし神の眞^{まこと}わが偽^{いつはり}に因りて顯はれ其榮光いや増さば我れいかで尚ほ罪人とせられんや」とある、其意は第五節と略ぼ同様である、そしてパウロは之に答へて「かくあらば我等^{そし}が誣^{そし}るゝ如く、善を來らせんとて惡を作す^なは宜^よからずや、こを我等が言と云へる者あり」(八節前半)と云ふて居る、當時パウロの徹底せる福音主義を誤解して、彼は「善を來らせんとて惡を作すは宜し」と宣傳して居ると做す輩があつた、

けだし如何なる罪人と雖も信仰によりて義とせらると云ふ教義は淺薄者説の誤解を招き易きほど革命的なものであつたのである、そしてパウロは今己れの受けし此攻撃の語を其のまゝユダヤ人に向けて反撃したのである、第七節の如き抗議は、實は「善を來らせんため惡を作すは宜し」と云ふと同じであつて眞に無意義の極、背理の至であると彼は云ふのである、そして彼は最後に「斯る人の罪せらるべきは宜なり」（八節後半）と云ひて愚言を爲す者に短き、併し強き叱責を加へたのである。

以上パウロはユダヤ人の立場より四個の抗議を出して一々之に答ふる所あつた、彼は此四抗議を軽く拂ひ退けたのである、多分彼は之に對して詳細なる辯明を爲すは餘りに愚なる事と思つたのであらう、彼は顔に微笑を湛えつゝ、之等の語を記したのであらう、實に彼は軽く愚言を斥けたのである、しかし銘刀はその輕き一閃を以ても敵を斃すに足る、之等のパウロの答は軽く、併し敵の急所を見事に刺したものと云ふべきである。

* * * *

第九節よりパウロは復た本論^(五)に歸つた、既に異邦人は悉く罪人と定まりユダヤ人も亦悉く罪人と定まり、後者より出づべき二三の抗議を斥けて茲に愈々人類全體を罪人と定むべき時となつたのである、先づ云ふ「然らば如何にぞや、われら勝れるか、決て^{きはめ}なし、そは我等すでにユダヤ人もギリシア人も皆罪の下に在る事を證せり^{あかし}」（第九節）と、「われら」はユダヤ人を指す、然らばユダヤ人は罪人なる點に於て異邦人に勝る所あるか、即ち異邦人以上の罪人であるか、否々罪人たる一點に於ては彼等と異邦人の間に何らの區別がない、既に第一章後半と第二章とを以て證せられし如く「ユダヤ人もギリシア人も皆罪の下に在る」のである、そして此兩人種は當時の人類

の二大別（其文化の性質より見て）であるが故に、凡ての人類が悉く罪人なりと證せられた事になるのである、さればパウロは次ぎの十節―十八節に於て聖句の引用を以て自己の九節の斷案を裏書せしめたのである、今これを少しく改めて左の如く記して見よう。

義人あるなし一人もあるなし

悟れる者なし神を求むる者なし

皆曲りて誰も彼も邪よこしまとなれり

善を行ふ者あるなし一人だにあるなし

其喉のどは開けし墓なり

其舌は詭詐いつはりを語り

其唇の下には蝮の毒あり

其口は詛のろひと苦にがきとにて滿つ

其足は血を流さんとして疾はやし

残害やぶれと災難わざはひとは其道に遺れり

彼等は平和の道を知らざるなり

神を畏おそれゝの懼其目の前にあるなし（と録されたる如し）

之は詩篇、以賽亞書等の各處より聖句を引き來つたものである、そして注意すべきは之が聖句を唯羅列したものの

ではなくて、或順序を逐ふて擧げたるものである事である、最後の句は第一の句と遙かに照應するものであつて、「義人あるなし」の理由として「神を畏るゝの懼其目の前になければなり」と云ふのである、そして其間に挿まれし十句は「義人あるなし」の説明と云ふべきものである、即ち之は聖句を集めて一の纏まつた思想を開設したのであつて筆者パウロの鮮かなる手腕は驚歎の外ないのである。

「義人あるなし一人もあるなし」は萬人有罪の事實の總括的斷定である、そして次に萬人の罪の状態を仔細に描くに當つて第一に「悟れる者なし神を求むる者なし」と云ひて罪の根原の在る所を摘示す、(悟れる者とは、眞に聰明なる者即ち眞に神を知れる者を意味する)、次には「皆曲りて誰も彼も邪よこしまとなれり、善を行ふ者あるなし、一人だにあるなし」と人の全體の行の惡しきを述べ、それより更に細説に入りて喉、舌、唇、口の惡しきを描く、これ言語を以てする人の罪を述べたものである、そして次には「其足は血を流さんとして疾はやし」と云ひて實行の上に現はるゝ罪を述べ、次ぎの二句を以て其結果たる状態を示し、そして最後に全體を總括すると共に第一語の理由提示として「神を畏るゝの懼其目の前にあるなし」と記す、整然たる思想の順序を逐ふて此有力なる聖句引用をなし、以て自己の所説を強めたるパウロの手腕を我等は認める、眞に有力なる且模範的な聖句引用と云ふべきである。

右の中「其喉は開けし墓なり」とあるはパレスチナ地方の自然の岩穴を以て墓とせし物はそれを蔽ふ所の石の蓋ふたが除かれて中の醜さを露はす事のあるに譬へたのである。

茲に當然一の疑問が起る、人類は斯くも腐敗せる者であるか、義しき人は一人だにないのであるか、これ或は

パウロの過言ではないかと、しかしこれは議論の問題にあらずして事實如何の問題である、比較的の善人は比較的の惡人と等しく人間世界に多い、併し絶對的に善なる者、義なる人が一人でも有るであらうか、よし極めて稀に此種の人があるとするもそれは除外例であつて、謂ゆる除外例は總則を證明するものである、如何なる人にも不善不義の分子が混入して居る、外に之が現はれなくとも心には必ず之が潜んでゐる、人生を長く經驗せる老年者はその經驗の上に立脚して一様にパウロの斷定を是認するであらう。

義人或は少しは此世にあるかも知れぬ、併しそれは人より見ての義人である、神より見ての義人とは云ひ得ない、「エホバ天より人の子を望み見て、悟る者神を探ぬる者ありやと見給ひしに、皆逆き出でて悉く腐れたり善を爲す者一人だになし」と詩篇十四篇に在る、然り、エホバ、天より人の子を望み見る時に争で一人として義人があらうや、人の心腸を探る彼に於て、頭髮の一つ一つを數へ給ふ彼に於て、我等の凡てが裸にて其前に現はるゝ彼に於て争で一人たりとも義人があらうか、クロムウェルの如き偉大者も己の罪を充分に認めて居た、他は推して知るべし、あゝ凡ての人は罪人である、義人は一人もない、曾て一人もなかつた、今も一人もない——至聖なりし彼れナザレの人を除いては。

パウロは一章十八節から本論に入り、まず異邦人の罪を挙げ、次にユダヤ人の罪を責めた。その論述の順序が正しいことはもちろん、その筆致は非常に巧妙である。ユダヤ人を責めた場合などは、まず間接的な威嚇から入り、次に堰を切った水のような勢いで一気に肉迫するという、まさに巧みさと鋭さを兼ね備えた攻撃であった。これに対しては、いかに頑ななユダヤ人であっても、一言の弁解もできないと思われる。ゆえに、パウロはこれから直ちに全人類の有罪を断定できるのである。ちょうど今日、まず不信者の罪を定め、次に信者の罪を定めた上は、ただちに全人類の罪を定められるのと同じである。しかしながら、パウロの周到さはここにもまた現れている。彼はユダヤ人の中からお二、三の抗議があるだろうと予想し、自ら彼らに代わって二、三の反問を出し、それらに対してそれぞれ簡潔な答えを与えている。この部分が第三章の一節から八節までである。ユダヤ人問題については、パウロは九章、十章、十一章で、自己の見解を詳しく述べている。ゆえに、ここではごく簡単にこの問題に触れるにとどめている。その様子は、ちょうど大通りを歩いているときに道に横たわる二、三の石を軽く蹴飛ばして片付けるかのようなものである。

第二章の論説に対して、ユダヤ人はまず質問を發して言うだろう。「それでは、ユダヤ人のすぐれている点は何ですか。割礼に何の益があるのですか」（二節）と。そしてパウロは、これに対してユダヤ人に何の長所もないとは言わなかった。彼らには種々の長所がある。しかも、この長所があり、神から多く恵まれているにもかかわら

ず、悪に身を任せているところに彼らの罪の特色があるのだ。そこでパウロはこの質問に対して答えて言った。「あらゆる点から見て、それは大いにあります。第一に、彼らは神のことばを委ねられました」（二節）と。「言葉」の原語 *logos*（ロゴス）は、英語の *oracle*（託宣）にあたる。すなわち、神から人への啓示の内容を言うのである。「使徒の働き」七章三十八節では、この語をもってモーセの律法を意味し（「みことば」という訳語を用いている）、「ヘブル人への手紙」五章十二節においては、この語をもって福音を意味している（「教え」と訳している）。語の性質上、場合によって内容が異なり得る語である。ロマ書三章二節の場合においては、旧約の教えの全てを指すとも見られ、また三節に照らして判断するときは、メシア預言のみを指すとも見られる。この狭い意味での見方を取る学者も少なくない。いずれにせよ、これを委ねられたということが、ユダヤ人が優れている第一の点である。

彼らの長所の「まず第一は」これである。では、第二、第三はどうか。パウロはそれを挙げるのを忘れたかのように、三節において直ちに第二の質問を掲げた。おそらく彼は、早くこの箇所を終えて本問題に入ろうと、歩みを速めたのだろう。彼はこの際、丁寧な解答をする面倒に耐えられなかったのである。すなわち、三節には、「では、どうですか。彼らのうちに不真実な者がいたなら、その不真実は神の真実を無にするのでしょうか。」これはユダヤ人の第二の反問である。ここに「不真実な者」とあるのは、キリストを信じない者の意味であるに違いない。なぜなら、神を信じない、あるいは神の約束を信じない者は、ユダヤ人の中には当然一人もいなかったと推定されるからである。彼らはメシア降臨の約束にあずかれる民であるのに、その約束に応じてキリストが来

られたとき、彼をキリストとして信じない。かえって彼らは彼を十字架につけた。しかも彼は復活して、そのキリストであることを実証し、使徒たちがその証人として立つても、彼らの中にはなお彼を信じない者が多い。このように彼らの大多数が不信仰である以上は、神もまたユダヤ人にかかわる将来の救いの約束を破られるだろうか。これが三節の意味である。そしてパウロはこれに対して、「たとえすべての人が偽り者であるとしても、神は真実な方であるとすべきです」（四節）と、きわめて簡明な解答を与えている。これを原語のままで訳せば、「断じてそうではない。神を真実とし、万人を偽り者とせよ」となる。人はすべて偽り者であり、そして神は絶対に真実である。不信仰とか偽りとかいう思想は、神という觀念と両立しない。神がその約束に対して不忠実であるというようなことは、神の本質上、到底あり得ないことであると、このようにパウロは答える。簡潔にして力強く、白日の光のように強い言葉である。

パウロはまたユダヤ人に代わって第三の問いを起こして言った。「では、もし私たちの不義が神の義を明らかにするのなら、私たちはどのように言うべきでしょうか。私は人間的な言い方をしますが、御怒りを下す神は不義なのでしょうか」（五節）ユダヤ人は不義不信仰であって神に背いている。しかるに神は義であって永遠に変わらない。それならば、ユダヤ人の不信仰は、たまたま神の真実を表すきっかけとなったのである。そうだとすれば、神はむしろユダヤ人に感謝すべきではないか。もし彼らに対して怒りを加えるならば、かえって恩人に向かつて鞭を加えるような不義となりはしないか、ということが五節の意味である。ちょうど放蕩息子がいるおかげで親の愛が発見されたとすれば、その親はむしろその子に感謝すべきであって罰すべ

きではないという論法である。この詭弁のような抗議を仮に設けて、パウロはこれに対して答えて言う。「絶対にそんなことはありません。もしそうなら、神はどのようにして、この世界をさばかれるでしょう。」不義者を罰しないような神ならば、どのようにして世をさばくことができるか。神が審判の神である以上は、到底不義者を罰せざるを得ないのである。

第四の反問は七節にある。「では、もし私の偽りによって神の真理がますます明らかにされて、神の栄光となるのなら、どうして私はなおも罪人としてさばかれるのですか」とある。その意味は五節とほぼ同様である。そしてパウロはこれに答えて、『善をもたらすために悪を行おう』ということになりませんか。私たちがそう言っていると、ある者たちから中傷されています」（八節前半）と言っている。当時、パウロの徹底した福音主義を誤解して、彼は「善を来させるために悪をすることは良い」と宣伝しているとみなす者たちがいた。なぜなら、いかなる罪人であっても信仰によって義とされるといふ教義は、浅はかな者たちの誤解を招きやすいほど革命的なものであったからである。そしてパウロは今、自分が受けたこの攻撃の言葉を、そのままユダヤ人に向けて反撃したのである。七節のような抗議は、実は「善をもたらすために悪を行おう」と言うのと同じであって、真に無意味の極み、道理に反することの極致であると彼は言うのである。そして彼は最後に、「そのように中傷する者たちが、さばきを受けるのは当然です」（八節後半）と言い、愚かな発言をする者に短く、しかし強い叱責を加えたのである。

以上、パウロはユダヤ人の立場から四つの抗議を出して、一つひとつこれに答えるところがあつた。彼はこの

四つの抗議を軽く払い退けたのである。おそらく彼は、これに対して詳細な弁明をするのはあまりにも愚かなことと思ったのだろう。彼は顔に微笑をたたえつつ、これらの言葉を記したのだろう。実に彼は軽く愚かな発言を退けたのである。しかし、銘刀はその軽い一閃をもつてしても敵を倒すに足る。これらのパウロの答えは軽く、しかし敵の急所を見事に刺したものだと言わなければならない。

* * * *

九節からパウロは再び本論に戻った。すでに異邦人はことごとく罪人と定められ、ユダヤ人もまたことごとく罪人と定められ、後者から出される二、三の抗議を退けて、ここにいいよ人類全体を罪人と定めるべき時となつたのである。まず言う。「では、どうなのでしょう。私たちにすぐれているところはあるのでしょうか。全くありません。私たちがすでに指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も、すべての人が罪の下にあるからです」（九節）と、「私たち」はユダヤ人を指す。それならば、ユダヤ人は罪人であるという点で異邦人に勝る所があるか。すなわち、異邦人以上の罪人であるか。いやいや、罪人であるという一点においては、彼らと異邦人の間に何の区別もない。すでに一章後半と二章とをもつて証言されたように、「ユダヤ人もギリシア人も、すべて罪の下にある」のである。そして、この二つの人種は当時の人類の二大別（その文化の性質から見て）であるから、すべての人類がことごとく罪人であると証言されたことになるのである。それゆえ、パウロは次の十節から十八節にかけて、聖書の引用をもつて自分の九節の断定を裏付けさせたのである。今これを少々改めて、次のように記してみよう。

義人はいない。一人もない。

悟る者はいない。

神を求める者はいない。

すべての者が離れて行き、だれもかれも無用の者となった。

善を行う者はいない。だれ一人いない。

彼らの喉は開いた墓。彼らはその舌で欺く。

彼らの唇の下にはまむしの毒がある。

彼らの口は、呪いと苦みに満ちている。

彼らの足は血を流すのに速く、

彼らの道には破壊と悲惨がある。

彼らは平和の道を知らない。」

彼らの目の前には、神に対する恐れがない（と記されているとおりである）。

これは詩篇、イザヤ書などの各所から聖句を引いてきたものである。そして注意すべきは、これが聖句をただ羅列したものではなく、ある順序を追って挙げられたものであるということである。最後の句は第一の句と遠く照応するものであって、「義人はいない」の理由として「彼らの目の前には、神に対する恐れがない」と言うのである。そして、その間に挟まれた十句は、「義人はいない」の説明というべきものである。すなわち、これは聖

句を集めて一つのまとまった思想を開設したのであって、筆者パウロの鮮やかな手腕は驚嘆に値する。「義人はいない。一人もない」は、万人有罪の事実の総括的な断定である。そして次に、万人の罪の状態を詳しく描くにあたって、第一に「悟る者はいない。神を求める者はいない」と言い、罪の根源のある所を指摘する。「悟る者」とは、真に聡明な者、すなわち真に神を知っている者を意味する。次には「すべての者が離れて行き、だれもかれも無用の者となった。善を行う者はいない。だれ一人いない」と、人の全体の行いが悪いことを述べ、それからさらに細説に入り、喉、舌、唇、口の悪を描く。これは言葉による人の罪を述べたものである。そして次には「彼らの足は血を流すのに速く」と言い、実行の上に現れる罪を述べ、次の二句をもってその結果の状態を示し、そして最後に全体を総括するとともに第一語の理由提示として「彼らの目の前には、神に対する恐れがない」と記す。整然とした思想の順序を追ってこの有力な聖句引用を行い、もって自分の論説を強めたパウロの手腕を私たちは認める。真に有力でかつ模範的な聖句引用というべきである。

右のうち、「彼らの喉は開いた墓」とあるのは、パレスチナ地方の自然の岩穴を墓としたものは、それを覆う石の蓋が除かれて、中の醜さを露わにすることがあることに例えたのである。

ここに当然一つの疑問が起くる。人類はこんなにも腐敗している者であるか。正しい人は一人もないのであるか。これは、あるいはパウロの言い過ぎではないか、と。しかし、これは議論の問題ではなく、事実がどうかという問題である。比較的な善人は、比較的な悪人と同じく人間世界に多い。しかし、絶对的に善なる者、正しい人が一人でもいるだろうか。たとえきわめてまれにこの種の人があるとしても、それは例外であって、いわ

ゆる例外は総則を証明するものである。いかなる人にも不善不義の分子が混入している。外にそれが現れなくても、心には必ずそれが潜んでいる。人生を長く経験した老年者は、その経験に立脚して一様にパウロの断定を是認するだろう。

義人あるいは少しはこの世にいるかもしれない。しかし、それは人から見ての正しい人である。神から見ての正しい人とは言えない。「主は天から人の子らを見下ろされた。悟る者 神を尋ね求める者がいるかどうかと。すべての者が離れて行き だれもかれも無用な者となった。善を行う者はいない。だれ一人いない」と詩篇十四篇にある。然り、主が天から人の子を見下ろすときに、どうして一人として正しい人がいようか。人の心を探る彼にとって、髪の毛の一本一本を数えられる彼にとって、私たちのすべてが裸でその前に現れる彼にとって、どうして一人たりとも正しい人がいようか。クロムウェルのような偉大な者も、自分の罪を十分に認めていた。他は推して知るべし。ああ、すべての人は罪人である。正しい人は一人もいない。かつて一人もいなかったし、今も一人もいない——ただ、至聖なるあの方、ナザレの人を除いては。